

デザイナーのための経済コラム(36)

生成AI・生成的人工知能について(1)

生成AIに参入するIT企業が続出しています。生成AIをどのように受け入れるかが、話題になっています。結論からいえば、社会は受け入れざるを得ないと思います。問題はどのように使うかであって、生成AIの出現は否定できないことだと考えます。それは産業革命で動力源に火力を使い、機械化することにイギリスでは打ちこわし騒動がありました。日本では、文明開化として受け入れています。今また、生成AIについても議論されています。100年後の人たちがこの話を知ったら何と思うでしょうか。人間の慎重さと思うか、臆病さと思うか。

また、米中のIT技術競争も議論され、米国は先端技術の流出を食い止めようとしています。これも、時間の問題だと思えます。利用価値があればあるほど、技術は水のように高いところから低い所へ流れます。あっても、無くてもどうでもいい技術、知識は普及しません。

IT業界ではPCの販売が伸び悩んでいる一方で、データ処理能力は年々伸びています。データ量の単位もMB・メガビットからGB・ギガビット、TB・テラビット、さらにPB・ペタビットと増大しています。さらにEB・エクサバイトがあると云います。

建築・デザイン・設計・施行関連業界では早くからCADが使われ、全体を統合するよにIDMも使われ出しています。これも、使いやすければ早く普及します。これは生成AIが生まれる基礎的な仕組みが生まれる背景ともいえると思えます。

10進法に基づき、1000倍ごとに単位が変わる基準を「国際単位系(SI単位系)」と呼んでいるので、これに従うと

KB・キロビット = 1,000 bit 千ビット
MB・メガビット = 1,000 bit X 1,000 = 1,000,000 bit 百万ビット
GB・ギガビット = 1,000,000 bit X 1,000 = 1,000,000,000 bit 10億ビット
TB・テラビット = 1,000,000,000,000 bit X 1,000 = 1,000,000,000,000 bit 1兆ビット
PT・ペタビット = 1,000,000,000,000,000 bit X 1,000 = 1,000,000,000,000,000 bit 千兆ビット

漢数字で表現すると、千、百万、十億、1兆、千兆、京(けい)、垓(がい)と続いていきます。億 : 10の8乗(10⁸)、兆 : 10の12乗(10¹²)、京 : 10の16乗、垓(がい) : 10の20乗……

今、量子コンピュータの実用化が進められています。量子コンピュータが使われるようになると、そのデータ量はさらに桁違いに増大します。生成AIにも確実に使われるようになると思えます。

古代インドの仏教経典の「ミリンダ王の問い(経)」(平凡社・東洋文庫)の中には無限に近い大きな数をインダス川の砂の数という表現をしています。漢訳では垓(がい)と訳されています。(ミリンダ王とはギリシア人・ヘレニズムと仏教との対話・紀元前1世紀中ごろ)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ミリンダ王の問い>

現代のインドでは2桁の掛けを小学生が習っていると言います。(東京のインド系インターナショナルスクール)インド人がIT業界で重要な仕事をし、業界をリードしているのも納得します。

知識、知恵に対する欧米の対応と日本の対応とは違っているように思います。日本では「三人寄れば文殊の知恵」、「深入経蔵知恵如海」、「岡目八目」、「負うた子に教えられる」というように、知識や知恵の受け入れについては寛容に、積極的に思います。また、和算としての数学は江戸時代には庶民がクイズ感覚で取り組んでいたようです。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/和算>

一方、西欧社会ではユダヤ経、キリスト経、イスラム経には旧約聖書の「はじめに言葉ありき」の思想が伝統としてあるように思います。「禁断の果実」や「バベルの塔」の話があるように、言葉や知恵は厄介なもの、人々の対立や分断を生むものという思い込みがあるようです。日本と西欧との言葉や知恵についての認識の違いは識字率に現れているようにも思います。(T.K.)

